

長編小説全集 5

石坂洋次郎集

講談社刊

石坂洋次郎集

——長編小説全集 5——

昭和三十六年十月二十五日第一刷発行

著者 石坂洋次郎

装幀者 原弘

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚(44)大代表三二一一
振替東京三九三〇番

二八〇円

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

石坂洋次郎集

山と川のある町

三

若い川の流れ

二二一

夏の陰画

三〇七

K町の思い出

三二七

著者紹介 明治三十三年、青森県弘前市に生まる。弘前中学時代から詩歌小説を地方新聞に投稿したが大正八年慶応義塾文学科予科へ入学、大学の授業にはあまり出席せず図書館と自宅で内外の文学書を耽読、特にロシア、フランス文学の翻譯書を読破した。十四年文学科国文科を卒業して帰郷、弘前高女に奉職したが翌年秋田県横手高女に転勤、昭和二年「三田文学」二月号に「海を見に行く」が掲載されて好評を得た。昭和四年横手中学に移り、水上瀧太郎の推薦で「文芸春秋」十一月号に「外交員」を発表、はじめて商業雑誌へ登場した。昭和八年から「三田文学」に「若い人」を連載し、昭和十年第一回三田文学賞をうけた。翌年「文芸」に「麦死なず」を発表、聖書の「一粒の麦死なば多くの実を結ぶべし」をとって題名のごとく実の結ばない場合を描いたが、この二作により作者の地位は決定的になった。「麦死なず」は中学教師五十嵐と妻のアキ、彼女に思想教育を口実にして誘惑するプロ作家牧野の三角關係を五十嵐の立場から描いた作者の代表係を五十嵐の立場から描いた作者の代表

年「改造」連載）が未明座で劇化上演された。昭和十三年「改造」に「闘犬図」を発表、「若い人」が右翼団体から告訴されたので勤続十四年の教育生活を清算して翌年上京、文筆生活に入り「暁の合唱」「美しき唇」「何処へ」「小さな独裁者」等を発表した。戦後は主として新聞小説に意をそそぎ、昭和二十二年朝日新聞に「青い山脈」を連載して以来、二十四年読売新聞に「山のかなたに」、二十七年朝日新聞に「丘は花ざかり」とヴェランぶりを發揮、その間「マギの恋」「石中先生行状記」や「母の自画像」（婦人倶楽部連載）があるが、「山と川のある町」は戦後の新旧思想の衝突と新しいモラルの確認とをテーマにして、北国の学園周辺を舞台にした四本目の新聞小説である。三十一年、朝日新聞連載。「若い川の流れ」は都会風の洗練された滑稽趣味のなかに、若い世代の信条を明るく描くことによって陰翳をもたせた作品である。三十三年「週刊明星」連載。「夏の陰画」および「K町の思い出」は女性のセックスの問題をネガティブに描くのセックスの問題をネガティブに描い

山
と
川
の
あ
る
町

きのこ汁パーティー

二学期がはじまる。

北国ではそのころ、秋晴れのいいお天気がつづく。雪がこないうちに思いきり晴れてやれ——とたくらんでもいえるような、意地ッぱりな晴れ方だ。

空はつき抜けたように青く高く、^{そうれい}壮麗な円天井を描いており、太陽の光は、一日中、万物を温めながら照りかがやいていた。そのおかげで稲は重たくみのつて、ひろい平野は、黄色な上等のジュウタンでものべひろげたような厚ほったいながめをみせていた。そして、学校のある、このあたりの丘を吹きぬける微風には、香ばしい米のにおいが含まれているような気がする。

さて、土曜日の授業は正午でおしまいだ。街のサイレン

の音が、切通しの丘や低地のたんぼを越えて響いてくると、学校の中は、はちの巣をつついたように、にわかに騒然となる。帰り仕度をする者、当番の掃除をはじめめる者、うたう者、のしる者、わめく者、ドタバタかける足音、机かなにかを倒す音など、まあ大変な騒ぎで、校舎自体が巨大なドラムに化けて鳴り響いているかのようだった。

しかし、そうした騒音の中にも、やっと一週間の課業を終えて、これからの半日と明日はまる一日、休んでおられるという解放感がこもっているのだから、人間の氣持って不思議な働きをするものである。

そういうくつろいだ気分は、職員室の中にも漂っていた。教師や生徒の出入りが絶え間なくある、ざわついた空気の中で、用事のない先生たちはお弁当を食べていた。見ていると、さまざまな食べ方をしている。

ある者は、弁当の横に雑誌をひろげてお、て、飯を一口パクついては、急いで雑誌の活字に目を走らせる。それを根気よく、何べんでも繰り返す。弁当がカラになるまではやみそうもない。家庭で、食事の時に、新聞を読みながら

ハシを用いて細君を嘆かせるのは、こういうタイプの男たちにはない。

またある者は、肩を盛り上らせ、前に深くかがみこんで、弁当をひた隠しに隠すようにしながら、黙々と食べつづけている。何かわるいことでもしているみたいで、ちょっと目ざわりだ。たまたまだれかに話しかけられたりすると、あわてて弁当のふたをしてから顔をあげる。これは、中にほこりが入らないように気を配っているのだろうが、もしかすると、自分の見つけた食物は、ほかの者に覚られまいとする、何万年も昔のわれわれの先祖の本能が、間遠く伝わって来ているのか知れない。

それとは反対に、ひどく陽気な弁当の使い方をしている者もある。イスに後向きにまたがって、弁当とハシをもった両手を大きく動かし、仲間のだれかと大声に談笑しながら、派手に食べている。オカズの塩ザケやつくだ煮を、ハシの先きにつまんで、口の中にほうりこむのがまる見えだ。たくあんはバリバリかみ、ときどき後の机からお茶をとってはズルズルとすすりこむ。——お行儀としては首をかしげさせられるが、しかしいかにも美味しそうなことは

たしかだ。

あれ、おしゃべりがすぎて、ハシの先きからたくあんの切れを落つことした！ どうするかと見ていると、イスにかけたまま屈みこんで、床のたくあんをハシでつまみ上げ、ブツとほこりを吹く真似をすると、そのまま口の中に……ほうりこみやがった！ ……あの男は長生きする！ ……

——国語の教師である八木敬助は、腹の虫がグウグウなくのを抑えながら、同僚たちが食事する有様を、つまらなそうにながめていた。彼も、なかみがピッシリつまった弁当を持って来ているのだが、いましばらくはそれを食べるわけにはいかないのだ。少くも午後一時三十分がすぎるまでは——。

八木敬助は今年二十六、動作はすこしスローモードだが、身体は丈夫な方であり、したがって、腹が空いたとなると、その感覚はそうとう猛烈に、彼の胃袋や食道や舌を刺激する。じっさい、同僚の人さまさまざまな食事ぶりをながめて、彼はいくど生つばをのみこんだか分らない。そして、そのたびに、掛時計の針のおそい動きに目をやるのだった。

ふと敬助は、上衣のポケットから、二つ折りにしたハート
ロン紙の封筒をとり出した。それを引きのぼすと、女の手
らしいきれいな書体で、

——きのこ汁パーティーへの御招待状——

と記されてある。なかみは、ノートを破いた紙片だが、
大きな字で、

来る十月八日（土曜日）、午後一時三十分から、校舎裏
の三角山のある地点で、マウ・マウ団の「きのこ汁パ
ーティー」を催すことになりました。ついては、このパ
ーティーに先生を御招待しようということに、団員の衆議が一
決致しました。先生には公私多端の折から、まげて御出
席下さいますれば、団員の感激これにすぎたるはござい
ません。

もし、幸いに御出席いただけるのでしたら、当日午後一
時三十分、弁当御持参で、裏庭の三本杉の所までお出で
下されば、団員の一人が出張して、先生を秘密の会場ま
で御案内する運びになっております。

なお、当方は学生という身分上、持ち寄りの資材にも限
度がありますので、御招待は先生御一人ということにな

っておりますから、その点お含みおき下さいませようお
願い致します。敬具。

八木敬助先生

マウ・マウ団

この招待状が敬助の机にのっていたのは、一昨日の昼の
ことだった。だれがもって来たのか分らないが、いずれに
してもマウ・マウ団の団員の一人にちがいない。

いったい、マウ・マウ団というのは、アフリカかどこか
に実在する、愛国的な秘密結社の名前だったような気がす
る。団員は土人ばかりで、テロ行為で片っぱしから白人を
やつつける恐ろしい団体のように、新聞は報道していたはず
だ。じっさいは、白人の方がわるいのだろうか……。

ところで、北国のK町の東高等学校のマウ・マウ団とい
うのは、そんな物騒な存在ではない。学生の気の合った同
士がつくっている親睦団体で、語呂が面白いからというの
で、ふざけてマウ・マウ団を名乗ったにすぎない……。

やっと午後一時三十分がめぐって来た。八木敬助は、い
くらかふんぜんとした恰好でイスから立ち上り、新聞紙に
包んだ弁当をつかんで、裏庭の方へ出て行った。

（人にこんなひもじい思いをさせやがって……きのこ汁いっぱいぐらいでおしまいというんだったら承知しないぞ。どいつもこいつも減点してやるから……）

空腹の気分というものは、職業のいかんを問わず、あまり結構なものではないらしい……。

裏庭は、桜や松やモミの並木に囲まれて、ひろい芝生になっていた。まだ多勢の学生たちが、すわったりかけたりして遊んでいた。汽車通学生が多く、汽車の時間に合せ、ここで時をすごしているらしい。

庭の地境いには桜が植わっていたが、それに混って、あまり大きくない三本の杉がかたまつて生えていた。三本杉とよばれて、なにかの目じるしにされている。

弁当を抱えた八木敬助が、あまりきげんのよくない顔で、その三本杉の所に近づくと、どこかに隠れて見張っていたのか、一年生の貝塚あさ子という女学生が音もなくかけ寄つて来た。

「先生、いらっしやい。パーティーの会場に御案内します」
そういつてあさ子は、両手を高く上げて、そのまま押しかぶさるやうにうやうやしく頭を下げた。回教徒がアラー

の神様を拜んするような恰好だが、それがマウ・マウ団の正式なお辞儀の仕方なのだ。——人間は、子供でも大人でも、団体をなすと、独特の様式をつくりたがるものである。

「やあ、ごころう。……君も団員だったの？ 知らなかった……」

「今年の五月から加盟させてもらいました」と、あさ子は得意そうに言つて、先きに立つて地境いのかき根をくぐつた。敬助もそれにつづいた。

貝塚あさ子は、背はまだそう伸びてないが、ハチきれそうにかた肥りしており、目鼻立ちのハッキリした顔は、筆で色をなすつたやうに赤くつやがあり、いかにも少女らしい清純さにあふれていた。黄の半そでのセーターにグレーのスカート、黄のソックスに底高の青いズックぐつをつつけ、ちぢれた髪を大きな水色のリボンで結んでいる。

二人は、かき根の外側に通じている、古い松葉が積つた小みちを、上手の方にたどつていった。

「せえんせい」と、あさ子が後向きのまま話しかけてきた。

「なんだい？」

「うちではね、上級生とはあまりつき合わない方がいいと言って、私が団員になることも賛成でなかったんですけど、マウ・マウ団の規約第一条が『団員間の恋愛は認めない』ということだと教えますと、母はすっかり感激して、ぜひ入団させていだきなさいって……」

「へえ。旧式な規約があったもんだな。封建的で反動的で……お話ならん」と、敬助はニヤニヤしながら言った。

「先生、からかってるんでしょう。……それにこの男子部の学生など、そういう対象としてみると、幼稚で、おかしくって、問題になりませんわ。そうでしょう？」

「きみ、いくつだったけな」

「十六です」

「お十六か。すこしませた気持だな……」

ふと、あさ子がヒタと足をとめた。なに気なしに、敬助が、後から肩越しにのぞくと、山かがしと思われる大きなヘビが、スルスルと小みちを横ぎっていた。陽あたりの所では、胴体が青びかりして不気味だった。それが、かたわらの草むらの中にはいこんでしまうと、あさ子はまた、何

事もなかったかのように歩き出した。落ちついて、物の役に立ちそうな子だ——と、敬助は思った。

「こちらへどうぞ——」と、途中からあさ子は、左手の雑木林の中に踏みこんだ。

こずえからもれる日光が、地上に密生した小笹のくすんだ緑の上に、明るい、まだらの模様を浮かせていた。

何か目じるしでもあるのか、あさ子はザワザワと小笹を踏み分けて、雑木の間を右に左に曲っていく。と、人の話声が聞え、食物の香がブーンとおって来た。そのにおいは、あっさりした植物性のもではなく、厚ぼったい動物質のものであることを、空腹のために鋭くなっている敬助の鼻は、まちがいにうかがい分けた。

（牛肉か豚肉か……いずれにしてもたいへん結構な心がけだ……）と、敬助は思わず舌なめずりをした。

話声がしだいに大きくなり、食物のにおいも一そう強くなった。そして、そのあたりから、小笹がふみしだかれ、しげんに小みちらしいものが出来ていた。

「ここが入口です」と、あさ子が指さすのを見ると、敬助の頭ぐらゐの高さの木の枝に、板ぎれがうちつけてあり、

雨露にさらされてうすくなった黒色で、

——東高校 野外喫煙所 ただし職員と女子は入所お断り——と記されてあった。

(まあまあ、かすかながらユーモアの精神があつてよろしい)

自分自身、旧制中学の三年生ごろから煙草をすった覚えがある敬助は、胸の中でそうつぶやいて苦笑した。

急に視界が明るくなった。前方に、青い空や黄一色にみのつた津軽平野の展望が、遠くひろく見はらされた。そこは丘のはずれで、しかもわざわざ刈りこんだように、かなりの広さの空地になっているのだ。

その空地には、十二、三人の学生が、円くなってすわっていた。女の子も四人ほどまじっている。中央に、太い木の枝を三本ほど組み合せたかぎがすえられ、大きなナベがつり下ってグツグツ煮えたっていた。ナベの底をたきつけている枯枝や木炭の熱気が、そこに顔を出した敬助に、いきなりムウと触れた。

団員たちは、敬助の姿を見ると、歓声をあげ、拍手をして迎えた。

「どうぞ先生、こちらへ——」

三年A組の委員で、マウ・マウ団の団長である田村甲吉が、平野の展望が一ばんよく見える場所に、敬助をすわせた。宿直室用のはらわたのはみ出した座布団まで持ち出して来てある。

「やあ、御招待ありがとう。……ところで、僕一人だけがこのパーティーに招待されたのはどういう理由なのかね？」

多勢の視線を一身に浴びせられた敬助は、少しぎこちない気持で、そんなことを尋ねた。と、案内役の貝塚あさ子が、「あら、それ、私が説明するようにって言いつかっていったんですけど、先生がなんにも仰言らなかつたから、黙ってたんです。……パーティーには、窮屈でない程度にお客さんがあった方が楽しい。そのお客さんに先生が選ばれたんです。どうして先生が選ばれたかって言いますと、みなさんの意見では、先生は貧乏寺に下宿していて、ロクな物も食べてないらしい……」

「バカにするな」と、敬助がどなった。

みんなドッと笑い出した。

田村甲吉がとりなすように、

「いやあ、先生、要するに、なんとなく、先生をお客さんにしようということだったんです。試験の時にリベート（お返し）を求めようなんていう企みのあるパーティーではありませんから……」

「当り前だ。きのこ汁ぐらいで買収される人間に見えるのかね、僕が——」と、敬助がまたはねかえした。

そして、そんなやりとりが、敬助をパーティーのふんいきにとけこませるのに役立った。

「さあ、それでは女子部にサーヴィスを頼むかな」

女の学生のことを、男の学生たちは、テレで「女子部」と呼んでいるのだが、ここにいる四人の女子部というのは、三年A組の副委員をしている雄弁家の井川たか子。同じく三年B組で、東高校のヴィナスというあだ名をもつ、美貌の早川のぶ子。二年生で絵がすばらしくうまい鳴海さち子。それから、貝塚あさ子だ。

田村団長に言われて、井川たか子と鳴海さち子が、シャクシをとってナベの中のきのこ汁をおわんにすくうと、早川のぶ子と貝塚あさ子がそれをみんなにくぼる役目をした。

「やあ、うまそうだな」と、敬助はおわんを手にしてさっそく一口すすった。

なかみは、きのこ豆腐と豚肉と馬鈴薯とだが、きのこの香と豚の脂の味が、みそ汁の中にうまくとけこんで、なかなかいい風味を出していた。

「すてきだ。……これだけの料理をするの、女子部たいへんだったな」と、敬助がお世辞を言うと、男の一人が目をもくような調子で、

「チェ。先生は、このごろの女子部の生態を知らないんだな。彼女たちはなんにもしないで、この仕度、みんな僕たちがやったんです……」

「まあ理窟もあるけどね。彼女らいわく、お嫁になれば、イヤというほど食事の仕度をしなければならいんだから、いまのうただけでも、そんなぬかみそくさい事はしたくないって……」

「先生、このきのこは、一昨日あたりから、昼休みの時間に、こちらで採ったのを貯めておいたんです。ほかの食料は持ち寄りです……」

汁のほかに、うまそうな色のたくあんも三切れずつ、み

んなに配られた。そして、食事はじまった。みんなよっぽど空腹だったとみえて、最初のころは、ほとんど口も利かずに、もくもくと口を動かしてつづけていた。

よくかんで半分とけかかった白い飯のどを通していくうまさ——。

濃い味のみそ汁が食道をぬらして胃袋に下りていく満足感——。

その間に、しぶく、よくつかったたくあんをポリポリとかむ快さ——。

ヘプライの文学（聖書）には、野外の食事の楽しい場面がよく描いてあるようだが、まったくだと思ふ。

丘のいただきから下の水田までのゆるい傾斜は、いちめんのすすき原になっており、折からのそよ風に、穂先が波のように乱れそよめいている。ひろい、厚ぼったい黄一色の稲田のところどころには、緑の樹々に囲まれた村が点在し、秋祭りでもあるのか、赤や白のぼりがひらめいているのが見える。

その間を、銀色の大川が、えぐったように深くうねって流れている。

時おり、後の方の頭上で、ザザーと松風が鳴った。雑木林の奥の方に、七、八本の松の老木が生えており、そのこずえが、空をわたる微風を受けとめて、素朴な音楽をかなでているのだが、気持のよかれはらい落してくるような、単純でふかみのある旋律だ……。

敬助は、きのこ汁を三杯お代りし、アルミの弁当の飯を、一粒も残さずきれいに平げた。だが、それで終ったわけではない。デザート（食後）にリンゴとセンベイが配られ、最後は香ばしい番茶まで出たのだから、まずは豪華な献立であると言わなければならぬ。

「ごちそうさま。……身体を動かさないほど食ったよ。少し楽にして休むからな……」と、敬助は立ち上って、雑木林からすすき原の傾斜に出て行き、地面に身体を長く投げ出して、それを片ひじで支えるようにした。そうすると、風が急にさわやかに感じられた。

女子部や男の学生たちも、ボツボツと敬助のいる方に出て来た。楽しげなおしゃべりがそここちではじまった。勝手にうたい出す者もある。そのうちにだれか手風琴を弾き出し、それに合せて団員の合唱がはじまった。

夕空はれて 秋風ふき

月影落ちて 鈴虫なく

思えば遠し 故郷の空

——ああわが父母 いかにおわす……

ときどきうたつてるとみえて、ちゃんとした合唱になっていた。敬助は、知ってる歌が出ると、自分も合唱に加わって、口を一ばいに動かしてうたった。うたいながら、男も女も一所ですごくすこいう時間、まったくすばらしいもんだなと思った。戦争末期にその年ごろを過ぎた敬助は、こんな経験をもったことが一ぺんもない。

それに、歌っていいものだ。それをうたつてると、気持ちが高まり、邪念が失せて、だれかれの見境なく肩をたたいて親しみたくなる。

「楽しいわね、先生……」と、歌が終ったところで、敬助のまくらもとにすわって、ときどき彼の髪をひっぱったりしていた貝塚あさ子が、そうささやいた。

「ああ、楽しいね。……僕は教師だけど、男女共学を上手

に楽しんでる君等をうらやましいと思うな……」

「そうでもないんですよ」と、それを耳にはさんだ田村甲吉が横から口を出した。

「僕たちの男女共学なんて、おっかなびっくりで、まだ真似ごとの段階ですよ。……これでみんな町のわが家に帰れば、そこには、夫婦がそろって外出することをイヤがる風習が、いまでも根強く残っているんですからね。そういう環境の中では、学校だけの男女共学なんて浮き上ってしまっていますよ。なあ、女子部。そうだね？」

「ええ、そう」と、女子部の代表みたいな井川たか子がそれに答えた。

「こうして歌なんかうたっていると、男女の間に隔てがないようですけど、じっさいはすこしも溶けこんでいませぬ。その証拠に、男同士、女同士の場合のように、くつろいだ率直な話は、男と女の学生の間では、まだ出来ませんもの……」

「ほんとはしたいんですけどね……」と、貝塚あさ子がませた口調で、そうおまけをつけたので、みんなドッと笑い出した。

「でもね、先生」と、ヴィナスというあだ名の早川のぶ子が、鼻にかかった、くせのある声で、

「夫婦って、人と人との結びつきの中で、一ばん大切なものだと思うのに、どうして私たちの先祖は、人の前で自分たちが夫婦であることを恥じたりしたんでしょうね？」

「むずかしい問題だな」と敬助は答えて、ちよっと間を置いた。

独身者である敬助は、昨年赴任して来た田舎町の単調な暮らしの中で、男と女の関係、夫婦の問題などで、しばしば熱っぽく考えこんだりしたことがあるので、早川のぶ子の質問に対する答えは、ちゃんと準備されていたのである。

「それは、何と言うか、私たちの先祖は、人間の自然の本能は、すべて恥ずべきものだという考え方で暮していたからだろうな。彼等の信念によれば、本能的なものは、すべて自分たちの考えだした、極端に様式化された生活の中に閉じこめられてしまわなければならないとする。様式化された生活というのは、例えば武士などの生活もそれで、主君、家臣、夫婦、親子、兄弟、みんなそれぞれに定まった位があつて、それを乱すことは許されない。また、喜怒哀

楽などの人間の自然の感情も、それをそのまま外に現わすことは恥ずべきことのように考えられていたわけだ。おかげで、私たちはおたがい、表情の乏しい、つまらない顔つきになっちまったと思うんだが……。

その中でも、性の問題は、特に卑しい不当な扱いをされて来た。それはいくら抑えようとしたって、いくら四角ばった窮屈な様式の中にはめこもうとしたって、頭隠してしり隠さずで、抑えきれはるはずのものではないのだ。私たちの先祖が、夫婦であることを人前に恥じたというのは、つまり人間の強力な本能である性欲を恥じたということになる。ずいぶん無理な話だ。

そこへいくと、欧米人は、近代に入ってからだろうが、人間の自然の諸欲望を無理に抑えようとせず、その形のままで洗練を加えていくという暮らし方をした。性の問題なども、それをまともに認めて、明るい日向の場面で処理している。やはりそのいき方が本当だろうな。

そして、その意味では、君たちは、日本の社会の新しい男女関係の風俗の創造者になるわけで、いちめん大胆に、いちめん慎重に、大いに努めてもらいたいと思うな……」

「そうかなあ……」と、男の学生の一人が、ぶっきら棒な調子で、疑わしげに言った。

「僕は、学校で言えば、むかしの男ばかりの中学校、女ばかりの女学校の方がいいと思うな。なにしろ、学校へ来ると、女子部の存在が、目ざわりで気がかりで、落ちつかないんだよ……」

「同感！」

「同感！」と、男たちの間から声が上がった。

「私はちがうな……」と、一言女史の小さな貝塚あさ子が口を出した。

「私はいまの学校の方がいいわ。私たちが学校にくると、娘一人にムコがトラック二台分も三台分もいるんだから、私たちぜんぜん仕合せだわ。男も女も両方都合よくはなかなかいかないものね」

「チビ公、だまれ！」

「生意気だぞ！」

ドッという笑声の中に、そんな抗議の声も聞えた。

「トラックではかられてはかなわないね」と、敬助は、あさ子の肩を軽くたたきながら言った。

「しかしね、はじめての男女共学としては、男女の比率が、ここぐらいのところが一ぱん理想的なのではないかね。男の学生の量がお赤飯だとすると、女子部はその上にふりかけられたゴマ塩ぐらいの量しかない。それでお互いがインスパイアされて、ちょうど工合がいいんだと思うね。その点、西の高校は、もとの女学校が化けたので、男女の比率は、こことは逆になっている。男がゴマ塩で、女がお赤飯だ。そして、そんな風に女の影響力が強いところでは、男女共学がうまくいかないと思うね。べつに女を軽蔑するわけではないんだが……」

「私、女だけど、それを認めますわ」と、井川たか子が発言した。

「女は多勢集まると、一種の毒気を生ずるものなんです。女同士はその毒気に不感症ですけど、中に混ってる少数の男の学生は、必ずそのネットリした毒気でスポイルされると思いますわ」

「鳴海君や早川君はどう思う？」

「認めたくないんだけど……女ばかり多勢集まっていると、ときどきいやな気がするがありますわ」と、早